

「その人らしく」、かなえる住まいを

シルバーウッド社長・下河原忠道さん（48）

朝日新聞 be（フロントランナー）2019年6月15日（土）



「銀木犀」自慢のヒノキ風呂。介護用の浴室も別にあるが、「みんなこっちに入りたいと思うはず。それが、生活のリズムや自立心の向上につながればいい」=千葉県船橋市

千葉県船橋市の住宅街に、先月オープンしたばかりの、一見すると普通のマンション「銀木犀（ぎんもくせい）〈船橋夏見〉」には、さまざまな人がやってくる。

併設した豚しゃぶレストラン

にランチを訪れる近隣の主婦ら、入り口に所狭しと並んだ駄菓子目当ての放課後の子どもたち……。

ヒノキの無垢（むく）材を使った段差のない床やトイレに備え付けられた緊急連絡ボタンを見て、ようやく高齢者向け住宅だと気づく人もいるだろう。運営する当人は「普通の賃貸住宅です」と、てらいがないが、その手法は内外の注目を集める。

20代で建物の躯体（くたい）に鋼材を使うスチール住宅を施工するシルバーウッド（千葉県浦安市）をおこし、2011年、高齢者住宅に参入。東京や千葉などで、食事サービスがあり、訪問介護事業所を併設した住宅10棟、グループホーム2棟を運営する。

運営方針の骨格を形づくったのは、ある夫妻との出会いだった。認知症の夫を介護してきた80代後半の妻が末期の乳がん余命宣告を受けたことを機に、最初に手がけた「銀木犀〈鎌ヶ谷〉」に、夫婦で入居してきた。

「私はここで死にます」「医療は一切要りません」。元看護師の妻は、病院では本人の望まない過度な治療を目にしてきたといい、はっきりと意思表示をした。そして「私が死に方を教えてあげる」と。

それからは、がむしゃらだった。「素人のすることじゃない」。批判は身内からも出た。地域で訪問診療などを行う医師や看護師らの協力を得て、彼女の希望した穏やかな最期をかなえるため奔走した。高齢者住宅などに入居しても5人に4人は、救急車で運ばれ病院で亡くなっている。だが、銀木犀では看取られて逝くのは、もはや普通の光景だ。

認知症があっても、その人らしく暮らせるように社会を変えたい、と言う。入居する9割に症状があるが、玄関に鍵をかけない。配膳も下膳も自分でできることは自分でやらせよう。「頼ることのすべてが悪ではないが、『何もしなくていい』では生きる張り合いをなくしてしまう」

銭湯の番台をしていた女性は、銀木犀の駄菓子屋の店番をして、その人らしさを取り戻したという。「豚しゃぶレストランの店長が、認知症のある人でもいいじゃないですか」

ここでは、入居者は支えられるだけの存在ではないのだ。「僕らは銀木犀を地域の人たちにどんどん開放して、あえて丸見えにすることで、固定観念をぶっ壊したいんです」

(文・鈴木淑子 写真・高橋雄大)

*

「矢面で踏ん張れば、受け入れてくれる」



豚しゃぶレストランでスタッフと。鍋の傾きが気になり、水平に置くにはどうしたらいいか、さっそく知恵を出すよう働きかける＝千葉県船橋市

——利用料は「近隣の相場に比べやや高い」（不動産情報大手のLIFULL子会社）とされますが、上回る価値を実感できるよう工夫しているそうですね。

僕らは、地主さんに眠っている土地の有効活用として高齢者住宅を提案し、地主さんが投資して建てた建物を長期間借り上げ、住戸部分を入居者に賃貸して運営しています。地主さんは建設に国の補助金が利用でき、建物はシルバーウッドが赤字にならない程度で建てます。

入居一時金は不要で、1カ月の賃料込みの利用料は、20万円前後ですが、ヒノキの風呂や家具職人が一点一点手作りした家具、きめ細かいサービスと質にはこだわっています。

——社会保障費に依存しない経営、をめざしているとか。

ええ。事業者の中には、関連する介護事業者のサービスを、入居者に限度額いっぱいまで受けさせて、収入を増やすところもあるのが実情です。僕らも訪問介護事業所を併設していますが、そこや外部のケアマネジャーに、（入居者が）自分でできることはやってもらうというスタンスをはっきりさせている。結果、介護サービスの利用頻度は低く、自慢なんです。

——かつてのシルバーウッドからすれば、まったく畑違いの事業です。

やると決めてから、まず日本中の高齢者施設を自分の足で回りましたが、さまざまな管につながれ、中には管を抜かないように手を縛られた高齢者の姿に、非常な違和感を覚えました。自分のめざすべき方向ではないと、バックパックで海外へ。

デンマークで「プライエボーリ」という介護付き高齢者住宅を見て、「何だ？ この差は」って驚きました。建物のクオリティーは全然上ですし、朝からワインを飲んでワイワイやってるんです。ほとんどが認知症のある人で、いよいよ自宅暮らしが難しくなってそこへやってくるのですが、最期までその人の生活を継続させるという運営の精神に心を打たれました。

■わんわん泣いた

——銀木犀の入居者にも学んだと聞きました。

「病院には行かない」という明確な意思を持った末期がんの女性との出会いが決定的でした。最後は救急車で運ばれ、病院という管理された空間で旅立っていく人が多いなか、長年医療に携わってきた彼女の導き出した結論がそれでした。教えられるまま、地域の診療所や訪問看護ステーションに協力をお願いに行きましたが、「素人が軽々しく看取りなどと言うべきではない」と散々な反応が返ってきたことも。辞めていったスタッフもいました。

やがて発語が難しくなった彼女に代わって、僕らを応援してくれたのは、毎日、小学生のお子さんを連れて通ってこられたお嫁さんでした。最後はスタッフみんなでわんわん泣いて、玄関から彼女の棺が出ていくのを見送りました。そこからですね、いい雰囲気が出来上がっていったのは。

——心残りもあったと。

開業間もない頃は、玄関の鍵をかけていたのですが、夫婦で入居していた女性の認知症の夫が、2階の窓からカーテンを伝って外に出ようとして、消防隊に救出された。結局、転居していただくしかなくて。大きな失敗でした。それからは鍵をかけるのはやめ、「帰りたい」

という人がいれば、止めずに、スタッフが付き添うようにしました。もちろん、何度も警察の厄介になって、こっぴどく怒られたことも。でも、そうやって僕らが矢面に立って踏ん張っていると、地域の人たちもだんだん事情がわかって、受け入れてくれるんです。今じゃ、近くの人が「また出てるよ」って電話してきてくれます。

■「役割」が変える

——先月開業の銀木犀は豚しゃぶレストランの「仕事付き」が売り物ですね。

これまでも駄菓子屋を開いて、認知症のある人にも店番をしてもらったり、地域の人がわーっとやってくるお祭りを催したりしてきましたが、自分の役割があると、みなさん生き生きするんです。その次が仕事です。何もみんなが働かなくてもいいんです。ただ、選択肢が少ない現状は変えていかないと。高齢者住宅に入居するというと、ネガティブなイメージを持たれがちですが、認知症になっても「あそこで生活して、働きたい」と思わせるような場所をつくれれば、まったく違って来る。そういう存在になりたいんです。

——めざすのは？

繁盛店です（笑）。「稼ぐ」高齢者住宅をつくってみようと。僕がやっているのは、福祉ではなく、ビジネスにちょっとだけ福祉的な要素をつけたことなんです。そうした要素があると、ビジネスがうまくいくのを見せることで、起業を準備している人が「自分もちょっとやってみようかな」と思ってくれたらしめたもの。「ちょっと」がたくさん積み上がったら、きっといい社会になるんじゃないでしょうか。

■プロフィール

★1971年、東京都生まれ。父の経営する鋼板加工会社に勤務後、渡米し、スチールパネル工法を学ぶ
=写真。帰国後の2000年、シルバーウッドを設立。コンビニやファミレスを建造する。11年、サービス付き高齢者向け住宅に参入。

★17年、「偏見を想像力に変える」を合言葉に、ゴーグル型の機器を用いて、認知症のある人の視界を疑似体験できる、仮想現実（VR）認知症プロジェクトを始動。これまでに3万5千人が体験した。

★15年、銀木犀（ぎんもくせい）の取り組みで、アジア太平洋高齢者ケア・イノベーション・アワード



最優秀賞受賞。17年にはVR認知症体験がテクノロジー部門最優秀賞に。

★「子どもの頃から、自分で決めたことを、投げ出さずにやり遂げると、ほめてもらった」。父も一代で事業を築き、母はもろみ酢の販売を手がける。妹は歌手の華原朋美さん。2児の父。